



種子島から得られた標本に基づく鹿児島県初記録となるオオクチヌメリ

松本達也¹・本村浩之¹

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）
TM: k8476135@kai.ac.jp (corresponding author)
HM: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp

Received 03 November 2025
Revised 07 November 2025
Accepted 07 November 2025
Published 07 November 2025
DOI 10.34583/ichthy.61.0_6

Tatsuya Matsumoto and Hiroyuki Motomura. 2025. First specimen-based Kagoshima record of *Eleutherochir opercularis* (Callionymidae) from Tanega-shima island, Osumi Islands, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 61: 6–10.

Abstract

A single female specimen (71.4 mm standard length) of *Eleutherochir opercularis* (Valenciennes, 1837) (Callionymidae) was collected from Tanega-shima island, Osumi Islands, Japan. Although in Japanese water *E. opercularis* has been recorded from southern Honshu, Shikoku, Kyushu and the Ryukyu Islands, there were no specimen-based records from Kagoshima Prefecture. Therefore, the presently reported specimen represents the first record from Kagoshima Prefecture.

ネズツポ科オオクチヌメリ属 *Eleutherochir* Bleeker, 1879 に対しては、標徴と属内に含まれる種数に複数の見解がある。Nakabo (1983) は、下顎先端部に複数の肉質突起をもつことと口裂が左右に大きく開くことにより *Eleutherochir* を定義し、属内に 6 種を認めた。一方、Fricke (1983) は第 2 背鰭と臀鰭に分枝鰭条をもつこと、両眼間隔が眼径よりも大きいこと、鰓蓋膜後端が胸鰭基部に達すること、および下顎に少数の微小な肉質突起をもつことにより本属を定義し、属内に 1 種のみを認めた。*Eleutherochir* のタイプ種であるオオクチヌメリ *E. opercularis* (Valenciennes, 1837) は、上記における両見解のいずれの場合も本属として扱われ、東インド洋と西太平洋の沿岸部に広く分布する (Fricke, 1983; Nakabo, 1983)。

2025 年 7 月 28 日に鹿児島県大隅諸島種子島から 1 個体のオオクチヌメリが採集された。これまで本種は、日本国内においては千葉県夷隅川河口から琉球列島にかけて散

発的に記録があり (Nakabo, 1983; 石川, 1997; 鈴木・瀬能, 2005; 片山ほか, 2011; 土居ほか, 2012; 緒方・村瀬, 2022; 犬塚ほか, 2024; 永井ほか, 2025), 鹿児島県内からは Nakane et al. (2011, 2013) による標本に基づかない記録のみが知られている。したがって、種子島から得られたオオクチヌメリの標本は、本種の鹿児島県からの標本に基づく初めての記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は、Nakabo (1982) にしたがった。体各部の計測はノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行い、計測値は体長に対する百分率で示した。記載標本と過去の記録との形態を比較するにあたり、Fricke (1983) は体長や頭長などの計測方法が Nakabo (1982) と異なっているため、その数値を引用しなかった。標準体長は体長または SL と表記した。オオクチヌメリ属 *Eleutherochir* の標徴と本属に含まれる種については Nakabo (1983) と中坊・土居内 (2013) の見解にしたがった。生鮮時の体色の記録は、ホルマリン固定の前に撮影された標本のカラー写真に基づいて記載した。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は本村 (2009) に準拠した。本研究に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館に保管され、上記の生鮮時の写真は同館データベースに登録されている。本研究で用いた研究機関略号は、KAUM (鹿児島大学総合研究博物館), USNM (スミソニアン国立自然史博物館), および YCM (横須賀市自然・人文博物館) である。

Eleutherochir opercularis (Valenciennes, 1837)

オオクチヌメリ

(Figs. 1, 2; Table 1)

標本 KAUM-I. 219495, 雌, 体長 71.4 mm, 鹿児島県熊毛郡中種子町納棺長浜海岸 (大隅諸島, 種子島) (30°32'44.5"N, 130°55'47.6"E), 水深 0.2 m, 手網, 2025 年 7 月 28 日, 松本達也。

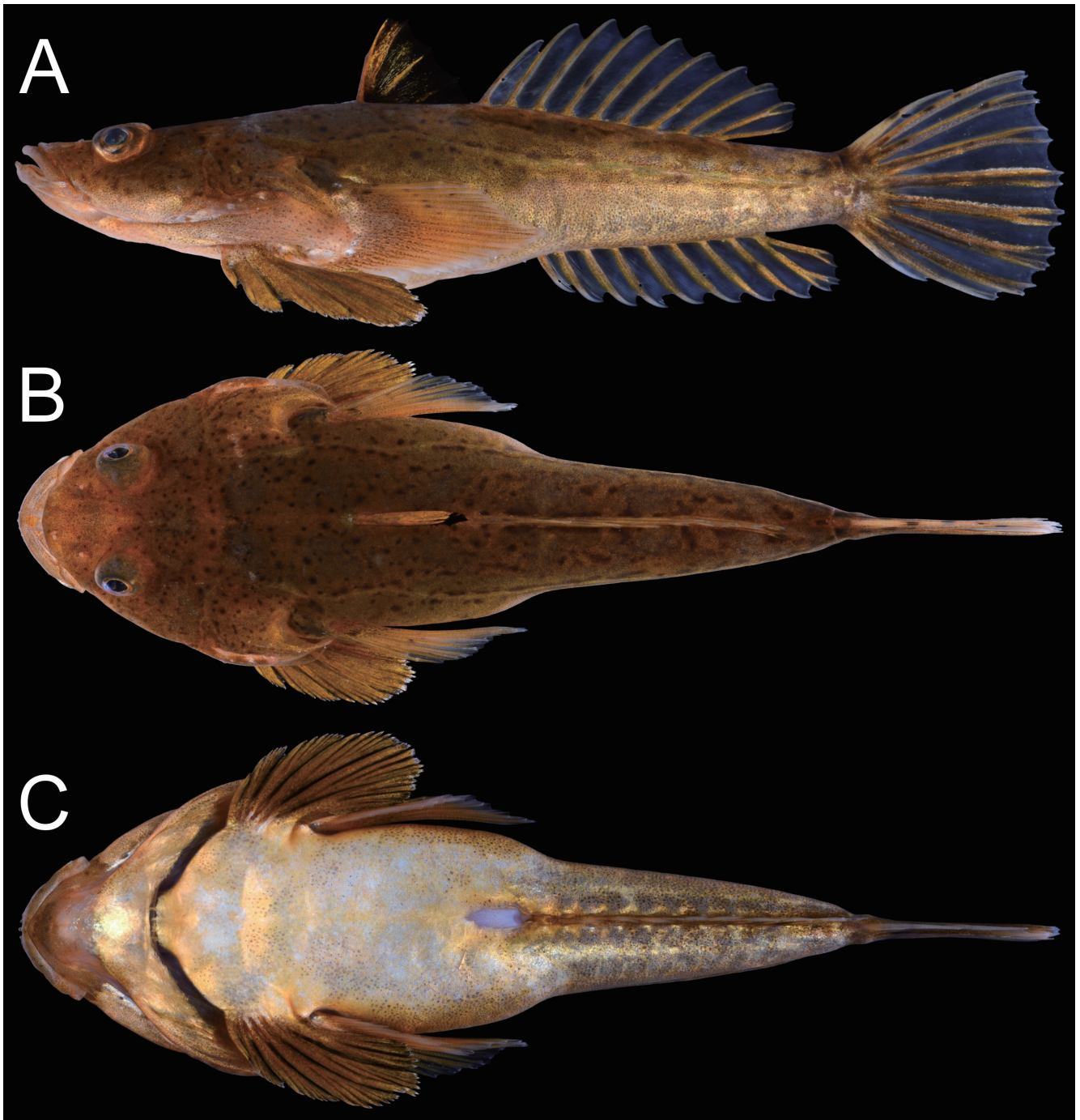


Fig. 1. Fresh specimen of *Eleutherochir opercularis* (KAUM-I. 219495, female, 71.4 mm SL) from Tanega-shima island, Osumi Islands, Kagoshima Prefecture, Japan. A: lateral view; B: dorsal view; C ventral view.

記載 体各部の計数・計測値を Table 1 に示す。頭部は強く縦扁し、体部にかけて側扁する。体背縁は吻端から第1背鰭起部にかけてほぼ一直線に緩やかに上昇し、第1背鰭起部から第2背鰭起部間は体軸に対してほぼ水平となり、第2背鰭起点から尾柄にかけて緩やかに下降する。体腹縁は下顎前端から第1背鰭直下にかけて緩やかに下降し、そこから臀鰭起部にかけて比較的急傾斜で上昇したのち、尾柄にかけて緩やかに上昇する。体高は第1背鰭直下において最大となる。頭部と体部の表面に鱗はない。下顎前端は上顎先端よりもわずかに前方へ突出する。下顎先端部には、9個の微小な肉質突起が左右へ向かい1列に並ぶ。

主上顎骨の後端は眼窩前端の直下に達しない。鼻孔は吻端と眼窩の間のやや眼窩側に位置し、縁辺は管状。眼と瞳孔は共に前後方向に僅かに長い楕円形で、側面から見て頭部背縁へ眼径の3分の1程度突出する。両顎には微小な円錐歯を多数もつ。鋤骨と口蓋骨の上に歯帯はない。前鰓蓋骨棘は眼径とほぼ同長で、背側に向かってやや湾曲する。前鰓蓋骨棘の背縁には6本の小棘が並ぶ。鰓蓋膜は薄く、胸鰭基部付近までよく伸長する。左右の鰓蓋膜は峡部前方で連結する。鰓孔上方から尾鰭基底にかけて、1本の側線がある。体側、体背面、および体腹面には皮摺はない。肛門小突起はきわめて微小で、その長さは瞳孔の直径よりも小

さい。第1背鰭の棘条はいずれも軟質で、第2棘が最長。第2背鰭は第4鰭条が最長で、第4、第6、および第8鰭条は先端付近で2分枝する。最終鰭条は基部で2本に分枝し、それぞれが先端付近でさらに2分枝する。臀鰭の起部は第2背鰭第3鰭条直下に位置する。臀鰭は第8鰭条が最長。臀鰭最終鰭条は基部で2本に分枝し、前方の鰭条は先端付近で3分枝、後方の鰭条は先端付近で2分枝する。尾鰭は後方縁辺がやや丸みを帯びた載形を呈し、各鰭条間の鰭膜の縁辺は浅く切れ込む。胸鰭基部は第1背鰭起部直下よりも前方に位置する。胸鰭は背側の1鰭条が不分枝で、それ以外の鰭条は全て分枝する。胸鰭は第8鰭条が最長で、その先端は臀鰭起部直上を越える。腹鰭は扇状で、その起部は鰓孔直下より前方に位置する。腹鰭は第5鰭条が最長であり、第1鰭条のみが不分枝で他の鰭条は全て分枝する。腹鰭鰭膜の縁辺は第1・2鰭条間と第2・3鰭条の間のみ浅く切れ込む。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) — 体部と頭部の背側は黄

褐色を呈し、小さな暗色斑が不規則に散在する。体部と頭部の腹側は下顎覆面を除き白色か光沢を帯びた黄色を呈し、微小な暗色斑が多数散在する。体腹面の肛門付近は青みを帯びた白。下顎覆面は褐色を帯びた橙で、微小な暗色斑が散在する。瞳孔を除く眼球は光沢を帯びた黄褐色、瞳孔は濃紺。第1背鰭の鰭条は赤みを帯びた黄色を呈する。第1背鰭鰭膜の地色は黒で、鰭条と同様の赤みを帯びた黄色斑が不規則に散在する。第2背鰭と臀鰭の鰭条の地色は明るい橙で、一部の鰭条上には不規則に1暗色斑がある。臀鰭鰭条の先端部は白色を呈する。第2背鰭と臀鰭の鰭膜はほとんど透明。尾鰭鰭条の地色は暗い黄褐色で、上葉側の4鰭条には不規則に数個の暗色斑がある。尾鰭各鰭条の先端部は白色を呈する。胸鰭鰭条の地色は橙で、特に基部付近に微小な暗色斑が密にある。腹鰭はほぼ一様に黄褐色で、鰭条先端部のみ白色を呈する。

分布 オオクチヌメリはインド、スリランカ、マレーシア、日本、台湾、フィリピン、インドネシア、パプアニューギニア、およびソロモン諸島から記録されている (Fricke, 1983, 2001; Nakabo, 1983; Shao et al., 2008)。日本国内からは神奈川県横須賀市秋谷海岸 (永井ほか, 2025)、静岡県の西伊豆町宇久須川河口と静岡市三保半島沿岸の内湾 (犬塚ほか, 2024)、徳島県阿南市那賀川河口 (土居ほか, 2012)、高知県香南市夜須川河口 (片山ほか, 2011)、および沖縄県の国頭村与那川 (沖縄島) と石垣市米山 (石垣島) (Nakabo, 1983) から標本に基づき記録されている (永井ほか, 2025: fig. 3)。また、本種は宮崎県宮崎市大淀川河口 (緒方・村瀬, 2022) と大分県佐伯市米水津湾 (永井ほか, 2025) および竹富町トウドウマリ浜 (西表島) (鈴木・瀬能, 2005; 永井ほか, 2025) から写真に基づく記録があり、千葉県いすみ市夷隅川河口 (石川, 1997) と鹿児島県吹上浜 (Nakane et al., 2011, 2013) から標本・写真に基づかない記録がある (永井ほか, 2025: fig. 3)。本研究により鹿児島県中種子町納棺長浜海岸 (大隅諸島, 種子島) における本種の分布も確認された。

備考 Nakabo (1983) は、下顎先端部に複数の肉質突起をもつことや、口裂が体側側へ大きく切れ込む形態的特徴に基づきオオクチヌメリ属 *Eleutherochir* を定義し、中坊・土居内 (2013) は、第1背鰭をもつこと、第2背鰭鰭条数と臀鰭鰭条数がともに9であること、両眼間隔が眼径より広いこと、および側線より腹側の体側に皮摺をもたないことにより、オオクチヌメリ *E. opercularis* が日本産同属他種と識別されることを示した。Fricke (1983) は *Eleutherochir* を *E. opercularis* 1種のみで構成される単型属とし、第2背鰭と臀鰭に分枝鰭条をもつこと、両眼間隔が眼径よりも大きいこと、鰓蓋膜後端が胸鰭基部に達すること、および下顎に複数の微小な肉質突起をもつことを本属・種の標徴とした。記載標本は、下顎先端部に複数の肉質突

Table 1. Counts and measurements of *Eleutherochir opercularis*. The previous studies included Nakabo (1983) ($n = 2$), Katayama et al. (2011) ($n = 1$), Doi et al. (2012) ($n = 2$), Inuzuka et al. (2024) ($n = 3$), and Nagai et al. (2025) ($n = 1$).

	Present study KAUM-I. 219495	Previous studies $n = 9$
Total length (mm)	90.7	
Standard length (SL; mm)	71.4	19.7–65.7
Counts		
Dorsal-fin rays	IV-9	IV-8–9
Anal-fin rays	9	8–9
Pectoral-fin rays	i + 22	i + 22–24
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5
Caudal-fin rays	ii + 8 + ii	i–iii + 6–10 + ii–iv
Measurements (as % of SL)		
Body width	21.1	20.9–29.9
Body depth	19.0	16.0–23.8
Caudal-peduncle depth	8.1	8.7–14.3
Pre-dorsal-fin length	39.2	37.8–48.3
Caudal-fin length	27.3	24.0–35.0
Head length	34.2	27.3–43.7
Eye diameter	6.9	6.5–11.2
Snout length	10.4	9.2–13.7
Upper-jaw length	12.2	9.3–14.7
Interorbital width	7.1	6.0–8.6
First dorsal-fin spine length	10.6	8.3–11.5
Second dorsal-fin spine length	12.3	8.3–12.4
Third dorsal-fin spine length	10.6	6.9–10.9
Fourth dorsal-fin spine length	7.0	3.1–6.5
First dorsal-fin ray length	11.5	10.0–13.6
Last dorsal-fin ray length	9.5	10.2–12.6
First anal-fin ray length	7.3	5.4–10.0
Last anal-fin ray length	11.1	10.7–16.0
Pectoral-fin length	24.6	21.6–25.2
Pelvic-fin length	25.4	23.1–34.5
Preopercular spine length	10.4	6.5–11.3
Anal-papilla length	1.4	0.6–1.8

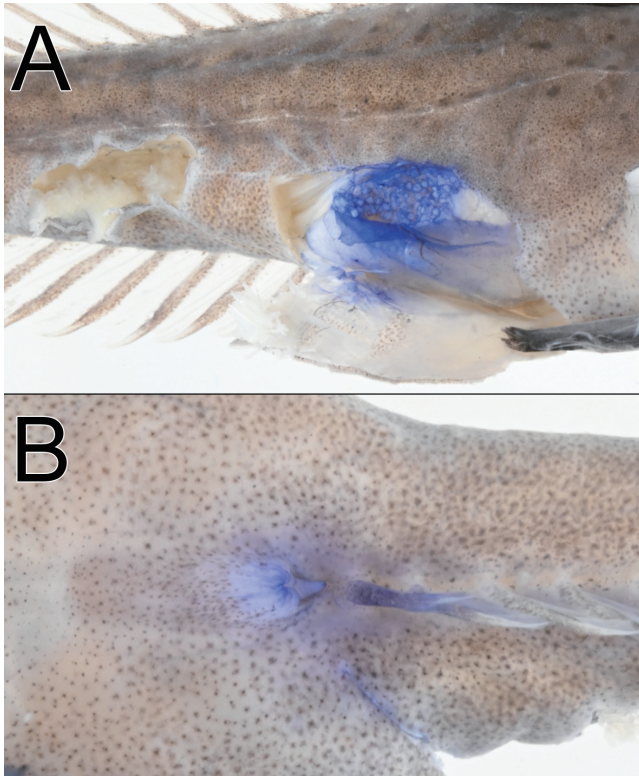


Fig. 2. Preserved specimen of *Eleutherochir opercularis* (KAUM-I. 219495, female, 71.4 mm SL). A: right side of body and ovary; B: enlarged view around anal papilla. A and B are temporally stained with cyanine blue.

起をもつこと、口裂が左右に大きく開くこと、第1背鰭をもつこと、第2背鰭鰭条数と臀鰭鰭条数がともに9であること、両眼間隔が眼径より広いこと、第2背鰭と臀鰭に分枝鰭条をもつこと、側線より腹側の体側に皮摺をもたないことなどの特徴が、Fricke (1983) と Nakabo (1983), 中坊・土居内 (2013) の示したオオクチヌメリ *E. opercularis* の特徴にいずれもよく一致したことから本種へ同定された。

記載標本の各計数・計測値を、過去に国内から報告された本種の標本の計数・計測値 (Nakabo, 1983; 片山ほか, 2011; 土居ほか, 2012; 犬塚ほか, 2024; 永井ほか, 2025) と比較したところ、過去の標本の数値とよく一致した (Table 1)。計測項目においては、尾柄高 (記載標本 8.1% SL に対し、過去の標本は 8.7–14.3% SL)、背鰭第4棘長 (7.0% SL に対し、3.1–6.5% SL)、および背鰭最終軟条長 (9.5% SL に対し、10.2–12.6% SL) の3項目が先行研究に示された計測値の範囲内に含まれなかったが (Table 1)、いずれもわずかな差異であること、および記載標本は比較に用いた先行研究の標本よりも大型であるため成長変異の可能性が考えられることから、種内変異の範囲内と判断した。

これまでに日本国内から採集されたオオクチヌメリの最大標本は、沖縄県国頭村与那川で採集された 66.3 mm SL の標本 (YCM-SP 7600; Nakabo, 1983) であったが、記載標本の体長 (71.4 mm SL) は YCM-SP 7600 を上回っており、現在知られている国内から得られた本種の最大標本

である。なお、現在知られている本種の最大体長は 77.9 mm SL (USNM 228961, Philippines; Fricke, 1983) である。また、記載標本の右体側をアルコール置換後に切開し、腹腔内を観察したところ、よく肥大した生殖腺と卵母細胞とみられる組織 (最大で直径約 0.4 mm) を確認した (Fig. 2A)。以上から、記載標本は雌の成熟個体と考えられる。

Fricke (1983) は本種の雄の肛門小突起長が、雌のそれよりも長いことを示した。永井ほか (2025) も三浦半島沿岸から得られた雌個体 (肛門小突起長は 0.6% SL) の計測値と、過去に記録された雄個体 (1.3–1.8% SL: Nakabo, 1983; 犬塚ほか, 2024) の計測値に基づき、Fricke (1983) の見解を支持した。一方、雌とみられる記載標本の肛門小突起長は体長の 1.4% であり、Nakabo (1983) や犬塚ほか (2024) に示された雄個体の計測値の範囲内に含まれ、Fricke (1983) の見解を支持しなかった (Table 1; Fig. 2B)。また、Fricke (1983) は本種の雌は背鰭第1棘が雌よりもやや伸長すると示したが、記載標本の背鰭第1棘長は先行研究に示された雄個体の計測値の範囲内 (Nakabo, 1983; 犬塚ほか, 2024) に含まれた。本種の形態的雌雄差については、さらに多くの標本に基づく詳細な検討が必要である。

オオクチヌメリの国内における記録は「分布」の項において記述したとおりである。鹿児島県内における本種の記録として、Nakane et al. (2011, 2013) により薩摩半島西岸の吹上浜から5個体 (16–23 mm SL) の報告があるものの、その文献中に証拠となる標本の情報や図などは示されていない。また、須田ほか (2014) は、Nakane et al. (2013) を引用したうえで吹上浜におけるバケヌメリ *Eleutherochir mirabilis* (Snyder, 1911) の分布を記録した。しかし、実際には Nakane et al. (2013) にバケヌメリの種名は示されておらず、同属魚類としてはオオクチヌメリ *E. opercularis* の学名のみが示されている。Nakane et al. (2011, 2013) と須田ほか (2014) に示された種名のどちらが正しい種同定かは不明であるものの、いずれにせよ再検証可能な標本情報がないことや、単一の出典に基づき再同定の言明などがなく、異なる種名が示されていることから、Nakane et al. (2011, 2013) と須田ほか (2014) による記録は本種およびバケヌメリの確実な記録として扱うべきではない。したがって本研究で報告した種子島産の標本は、大隅諸島ならびに鹿児島県からのオオクチヌメリの標本に基づく初めての確実な記録となる。

本種は汽水域の砂底に生息するとされ (中坊・土居内, 2013)、これまで日本国内から記録された個体の多くも河口域から採集・記録されている (片山ほか, 2011; 土居ほか, 2012; 緒方・村瀬, 2022; 犬塚ほか, 2024)。本研究による記載標本も、小規模河川の河口近くの砂底において採集されており、中坊・土居内 (2013) が示した本種の生息環境によく一致した。

謝 辞

中種子町長の田淵川寿広氏と久木原清貴氏をはじめとする中種子町教育委員会社会教育課のみなさま、および種子島漁業協同組合中種子支所のみなさまには、中種子町におけるフィールド調査に関して全面的なご協力いただいた。鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアの皆さまには、標本の作製、撮影、登録おいてご協力いただいた。同研究室の出羽優風氏には文献の調査にご協力いただいた。匿名の査読者と *Ichthy* 編集委員の吉田朋弘氏には、本報告に対し適切な助言を賜った。以上の方々に謹んで感謝の意を表する。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は中種子町、公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費 (20H03311・21H03651・23K20304・24K02087)、JSPS 研究奨励費 (DC2: 24KJ1838)、JSPS 研究拠点形成事業— B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009)、文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」、および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

- 土居敏幸・佐藤陽一・尾嶋百合香・伊藤道啓・小藤美樹・三島隆伸. 2012. 徳島県的那賀川河口から採集されたオオクチヌメリ *Eleutherochir opercularis* (ネズッポ科 Callionymidae). 徳島県立博物館研究報告, 22: 151–156.
- Fricke, R. 1983. Revision of the Indo-Pacific genera and species of the dragonet family Callionymidae (Teleostei). Theses Zoologicae 3. Verlag von J. Cramer, Braunschweig. xi + 774 pp.
- Fricke, R. 2001. Family Callionymidae, pp. 3549–3571. In Carpenter, K. E. and V. H. Niem (eds.) FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 6. Bony fishes, part 4 (Labridae to Latimeriidae). FAO, Rome.

- 犬塚敦己・岸 俊樹・坂本滉太郎・高見宗広・武藤文人. 2024. 駿河湾初記録のオオクチヌメリ *Eleutherochir opercularis* (スズキ目: ネズッポ科). 東海自然誌, 17: 57–62.
- 石川雅朗. 1997. どう守る? 首都圏近くの豊かな川. 食の科学, 234: 24–28.
- 片山英里・松本恭平・中村和喜・町田吉彦. 2011. オオクチヌメリの四国初記録 (スズキ目ネズッポ科). 四国自然史科学研究, 6: 6–9.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- 永井亮羽・高橋麟太郎・尾山大知. 2025. 神奈川県三浦半島西岸から得られた相模湾初記録のネズッポ科魚類オオクチヌメリ. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 60: 30–35.
- Nakabo, T. 1982. Revision of genera of the dragonets (Pisces: Callionymidae). Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 27: 77–131.
- Nakabo, T. 1983. Revision of the dragonets (Pisces: Callionymidae) found in the waters of Japan. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 27: 193–259.
- 中坊徹次・土居内 龍. 2013. ネズッポ科, pp. 1331–1345, 2106–2108. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Nakane, Y., Y. Suda and M. Sano. 2011. Food habits of fishes on an exposed sandy beach at Fukiagehama, South-West Kyushu Island, Japan. *Helgoland Marine Research*, 65: 123–131.
- Nakane, Y., Y. Suda and M. Sano. 2013. Responses of fish assemblage structures to sandy beach types in Kyushu Island, southern Japan. *Marine Biology*, 160: 1564–1581.
- 緒方悠輝也・村瀬敦宣. 2022. 大淀川で撮影された写真に基づく宮崎県初記録のネズッポ科魚類オオクチヌメリ. 宮崎の自然と環境, 7: 82–84.
- Shao, K.-T., H.-C. Ho, P.-L. Lin, P.-F. Lee, M.-Y. Lee, C.-Y. Tsai, Y.-C. Lin, J.-P. Chen and H.-M. Yeh. 2008. A checklist of the fishes of southern Taiwan, northern South China Sea. *Raffles Bulletin of Zoology, Supplement*, 19: 233–271.
- 須田有輔・中根幸則・大富 潤・國森拓也. 2014. 開放的な砂浜海岸である鹿児島県吹上浜のサーフゾーン魚類相. 水産大学校研究報告, 63: 1–15.
- 鈴木寿之・瀬能 宏. 2005. 西表島浦内川とトウドウマリ浜の魚類目録 (予報), pp. 12–22. 西表島浦内川流域研究会 (編) 西表島浦内川河口域の生物多様性と伝統的自然資源利用の総合調査報告書 II. 西表島浦内川流域研究会, 竹富.